

早産妊婦のケア経験から

椎野泰明

社会保険広島市民病院リハビリテーション科主任部長

筆者はリウマチ医療にもかかわっているが、近年ケアという言葉がこの世界でも盛んにいわれるようになってきた。講演を依頼され、その専門家でもないのに話さなければならない。仕方なくその歴史を勉強するところとなった。

ケアについては西洋より東洋思想のほうが進んでいる。莊子は紀元前4世紀に「善養生者、若牧羊然」と言った。牧羊こそがケアの本質と考えられるからである。西洋ではその頃ヒポクラテスの誓いがあったが、その中にはケアの形がない。

ルネッサンスの時代を経てデカルトが心身分離を唱え、その頃より医学は科学であり技術が全てと考えられた。このことは医学の進歩にとって有意義であったかもしれない。しかし当然のこととして「心」に対する配慮も次第に欠けるところとなる。

西暦1900年代始めにフランスのベルクソンが心身合一を唱えることで「心」の問題が医学においても少しずつ考えられるところとなる。日本においては戦前から大阪大学において澤潟久敬先生により医学概論の講義が行なわれたことはわれわれにも大変誇らしいことである。

一方、医療の現場ではQOL(quality of life)が最近よく使われるようになってきた。最初に「QOL」という言葉を用いたのはケネディ暗殺後就任したジョンソン大統領であると言われていた。量から質の時代への変貌である。その頃プライマリケアが看護婦の世界でよく用いられるようになった。

さて、人間の苦しみには4つの

苦があり「生老病死」でよく知られている。ケアの本質はこの4つの苦しみに対応するかのようである。すなわち生のケア perinatal care, 老のケア elder care, 病のケア primary care, 死のケア terminal care である。老・病・死のケアは今話題になっているが、生のケアについては他に少し遅れるところがある。このような話をすると、ある看護婦が「クリミア戦争は何年でしたかね」と私に問いかけた。フローレンス・ナイチンゲールがケアの代表のように思うらしい。実はクリミア戦争は1845年のことである。またナイチンゲールは少なくとも病に対するケアで有名なのである。

最近、早産のため長期の安静臥床を余儀なくされ、帝切後歩きはじめたところ、膝の関節痛、足に力が入らないと訴える妊婦が紹介されてきた。まさに「廃用症候群」である。助産婦は一生懸命まし、とにかく歩かせようとしていた。しかし痛みは強くなる。この褥婦に対してまず安静をとり、膝関節の関節炎症状を抑制し、並行して大腿四頭筋と背筋の筋力増強を行なった。人間の体にある400の筋のうち大腿四頭筋は最も未熟な筋といわれ、小さなトラブルでもすぐにダメージを受けると言われている。このような訓練で褥婦は歩行を取り戻し、子どもと笑顔で退院していった。その後産科医の理解のもと品胎の妊婦を紹介していただき、産前・産後の理学療法を経験した次第である。このように考えるとケアの本質への注目とチーム医療の重要性は今後ますます高まっていくであろう。

